

政宗が始めた茶栽培

北上川の川岸から鹿島山への急坂を、息を切らしつつ上る。杉林がぼっかり開けたかと思うと、いきなり美しい茶畑が現れた。刈り込まれた茶樹の畝が山肌を覆って整然と並ぶ。眼下の樹間に北上川の川面が輝くのが見えた。ここは石巻市北部、桃生町にある鹿島茶園。「産業として成り立っているものとしては日本の北限で、宮城に残る唯一の茶畑でもあります」

そう教えてくれたのは、鹿島茶園の「桃生茶」を一手に扱う茶商、矢部園茶舗の矢部亨さんだ。

茶人としても知られた政宗は、茶の樹を取り寄せ領内各地に植えさせたといわれる。書状に「奥州の宇治といわれるほどになるだろう」というような記述も残されている



ほどで、矢部さんによれば仙台市内にも茶畑と付く地名が残っているという。

その後、幕末には再び藩主によって栽培が奨励されたが、気候の関係で収穫量も少なく、静岡や京都などの有力産地に太刀打ちできず、明治をピークに次第に衰退の道をたどる。鹿島茶園も明治に

北上川の霧に育まれる

貴重な茶

開かれ、その後廃れていたが、昭和30年代に現在の園主、佐々木浩さんの祖父が再興したという。

ここでは北上川の川霧がおいしいお茶を育むといわれる。とはいえ冬に雪が積もる地でいい茶を作るには、大変な努力や工夫が必要だ。畝間には、刈り取って乾燥させ

た茶の枝葉が敷き詰められているが、これが雪や夏の強い日差しから茶の根を守るのだという。

「茶畑があるなんて思いもしないようなこんな山の中で、大切に育ててきた茶畑への熱い思い、日々の努力には本当に心を打たれます」と矢部さん。桃生茶は近年まで

地元消費が大半で、商売にはならない状況が続いてきたという。茶園を育ててきた佐々木家の熱意と努力に報い、この素晴らしい茶の味わいを、そして政宗から続く宮城の茶の伝統を何とかして守りたい。そのために販路を開き、その存在を広く世に知らしめたい。桃生茶にほれ込んだ矢部さんにはそんな思いがある。



4/鹿島茶園で栽培されている桃生茶の茶葉。5/この日矢部さんが振る舞ってくれた、桃生茶の水出し茶。水で茶の甘みをじっくり抽出して飲むのも味わい深い。6/鹿島茶園が大切に育てている、美しい茶畑。7/鹿島茶園の現在の園主、佐々木浩さん

【矢部園茶舗】 所宮城県塩竈市海岸通2-3 図JR「本塩釜駅」から徒歩約3分 ☎022-364-1515



「ぜひ茶畑で味わってほしい」と矢部さんが特別に振る舞ってくれたお茶は、目が覚めるようなおいしさだった。清澄な甘みと旨み、爽やかな苦み、そして山を吹き渡る風を思わせる香り……。その味わいには、政宗に始まり佐々木さんや矢部さんに至る、茶に魅せられた人々の思いと物語が託されている。

矢部園茶舗の矢部亨さん

AD

上越市本町商店街

1/鹿島茶園で、いつから育っているか分からないほど古いものだという在来種の茶。2/桃生茶をはじめ、さまざまな茶を販売する矢部園茶舗。3/「伊達茶」として販売しているペットボトル茶。桃生茶の一番茶葉を100%使用した数量限定品